

高等学校

平成 5 年 度

教 育 研 究 員 研 究 報 告 書

芸 術 (音 楽)

東 京 都 教 育 委 員 会

平成 5 年 度
教 育 研 究 員 名 簿 （ 音 案 ）

学 校 名	氏 名
都 立 大 森 高 等 学 校	宮 下 俊 也
都 立 代 々 木 高 等 学 校	前 原 覚
都 立 豊 多 摩 高 等 学 校	杉 浦 昭 彦
都 立 足 立 新 田 高 等 学 校	玉 井 操
都 立 五 日 市 高 等 学 校	田 戸 正 彦

— 研 究 主 題 —

新たな音楽的基礎力としての「意欲」を 育成するための指導と評価の工夫

目 次

I 主題設定の理由	2
II 研究の経過	3
III 研究の内容	3
1 「意欲」を新たな音楽的基礎力としてとらえることの意味	3
2 「意欲」の育成における評価の在り方	4
3 指導事例	6
指導事例1 キーボードを弾いてみよう 打楽器をたたいてみよう	6
指導事例2 ラテン音楽のリズムパターンを用いた打楽器アンサンブル	10
指導事例3 基本的コードネームを生かした鍵盤和声の理解と実践	13
指導事例4 生き生きとしたリズムのパフォーマーになろう	17
指導事例5 音楽による感動を伝え、共感する仲間を増やそう（鑑賞）	21
IV まとめと今後の課題	24

I 主題設定の理由

高校生の音楽の楽しみ方はここ数年で大きく変わってきている。例えばカラオケ、ヘッドフォンなど、日常的な音楽の楽しみ方は多様になってきている。しかし生徒の音楽の楽しみ方を細部にわたって観察してみると次のような傾向が見られる。

まず、多くの生徒が学校音楽と自分達の音楽を区別していることである。ヘッドフォンを楽しむことは音楽を身近にする一方で、常に聞き続けることによって音楽をBGM化して聴く傾向を強めている。また、自分の好きな曲に対しては音符を読んだり、そのメロディーを奏でたりすることよりも、耳から聞こえるメロディーを模倣することに終始する傾向もある。

このことは読譜力、演奏力等の基礎力が十分でないことが一つの原因となっている。また、別の視点からは音楽に対する意欲が育成されていないことが原因とも言える。

生涯学習の視点から、このような基礎力や意欲の育成は音楽教育において不可欠である。

今年度の5名の教育研究員の共通の願いは、生涯にわたって音楽を愛し、主体的に音楽活動続ける生徒に育って欲しいということである。

しかし生徒の傾向として前述のように、基礎力、主体的に音楽活動続ける意欲と能力が不十分であることがうかがえる。これまでの音楽学習の中で育成されるべきこれらの基礎力が高校段階で不十分であることが多い状況が現実にはある。

その背景の中には基礎力を音高、音程…と分析し、一つ一つをクローズアップしながら養成しようとするシステマチックな基礎力の養成の仕方への偏り、あるいは音楽科としての指導目標を持たずに単に楽しさのみを重視することによる、基礎力育成の軽視等が指摘できる。

いずれにしても基礎力における生徒のこのような状況がある中で、音楽授業を別の次元のものとして敬遠する高校生の傾向に対して解決を図ることが必要である。音楽の授業の中で広い意味での音楽を見つめる新たな目を開き、自ら音楽を楽しむ力をつけ、それを支える意欲を培うことを目指すことが大切なのである。

したがって、本研究は主体的音楽活動を支える真の基礎力とは何かを見直し、その結果、「音楽への思い」と「思いを向けられる対象の蓄え」という新しい基礎力観を打ち立てることとした。社会へ羽ばたいていく彼らにとって高等学校における音楽学習は、まさに「音楽への思い」を深めることの出来る大切な場なのである。

新しい基礎力観と、それに伴う新しい評価観に対する考察を通して、生徒が生涯にわたり音楽を主体的に愛し続けることができるような授業を目指して本研究主題を設定した。

Ⅱ 研究の経過

今回の研究を進めるにあたって、「音楽の基礎力」をどう捉えるか、そして新しい、また実態に即した「評価」とは何か、の二点にポイントを絞った。以下、論議がどう展開していったのか、順を追って簡潔に記しておきたい。

5月－研究主題が決定。リズム感及び読譜力の育成の重要性が共通に出された。また、従来の評価方法を見直し、生徒の内面を把握する、総合的な評価の必要性が挙げられた。

6月－身に付けさせたい基礎力の共通理解を図った。生涯にわたって音楽を愛好するために必要な基礎力の育成及び、個人内評価、情意面の評価の工夫を重視することとした。

7月－主題に沿った事例（仮説を含む）を出し、各授業のねらいと展開を具体的に検証した。

8月－主題設定理由について共通理解を深めた。「基礎力」については、従来の要素的なものではなく、生徒の意欲にスポットを当て、その意欲の在るべき状態を洞察し、新たな基礎力観を提示していくこととなった。「評価」については、授業の展開の中で予め評価ポイントを設定し、生徒一人一人の長所を見だし、生徒理解を重視した、総合的かつ継続的な評価を目指すこととした。

9月－主題に基づいて実践を行い、それを記録し、実践の検証と今後の課題を考察した。

10月－テーマの変更。研究を進めるに従い、「意欲」のとらえ方が変わってきたことで、当初のテーマでは、研究内容が的確に表されなくなった。「意欲」とは何か、を明確にするための論議を深めた。

11月以降－原稿の執筆と、仮説に基づいた授業の実施とその検証を行った。

Ⅲ 研究の内容

1 「意欲」を新たな音楽的基礎力としてとらえることの意味

音楽科における「意欲」の概念は、本来「心情」「情操」「創造性」という音楽科の教科性に関わる重要な情意領域として考察される必要がある。しかし「音楽学習を意欲的に行わせるにはどうすべきか」といった研究事例に見られるように、「意欲」は「積極性」と同様の意義としてとらえられていることが多い。即ち、意欲は楽しみながら知識や技術を習得させたり、感動体験させたり、また音楽を愛好する心情を育てていこうとするために必要な行為的側面としてとらえられている。つまり「意欲」は音楽科が求める学力習得のためにふさわしい行為として副次的にその育成が図られてきたものと考えられる。

今般、新学習指導要領、新指導要録によって「関心・意欲・態度」を学力の一つとして認め、

評価していこうとする、「新たな学力観」「評価観」が提示された。そこで本研究ではこの新学力観、新評価観を踏まえ、「意欲」を音楽科で求める重要な一つの「学力」として浮上させることを試みた。つまり「読譜力を意欲的に身に付けさせるにはどうしたらよいか」といった「～をするための『意欲』ではなく、「意欲」そのものを「読譜力」や「発声技術」等の音楽的諸能力と同次元で捉え、育成しようとするものである。また、その「意欲」は音楽科で育成する多くの学力の中でも特に「基礎・基本」に相応する「音楽的基礎力」、即ちすべての生徒に身に付けてほしいものであると考えた。

次に、本研究で育成したい「意欲」を「音楽への思い」として意義づけた。さらに、そうした意欲が湧き上がるためには、音楽への思いをむけられるような対象を蓄えさせていくことが必要であると考えた。生涯学習への大切な時期である高等学校では、生徒がこれから生涯にわたって音楽への思いを持ち続けられるような対象を少しでも多く蓄えさせてやりたいという願いを持つからである。例えば生徒にとってまったく新しい音楽ジャンルや音楽の不思議さについての学習や、現実の生活に結びついたリズムや、生命感溢れる躍動的なリズムの学習によって、その知識や体験が、やがては生涯にわたる「音楽への思い」の対象として蓄えられていくものと思われる。

カラオケへ通ったり、ヘッドホンを離さないという音楽の楽しみ方、また音楽授業への参加意欲の低下といった現状は、社会や家庭環境、また生徒自身が抱える悩みや葛藤なども少なからず影響しており、教師はそのような生徒の状況を理解する必要がある。そしてこうした現実を生きる高校生に対し、生涯にわたって音楽学習し、主体的な音楽活動へ向かっていく力の育成を目指すことが大切であり、その力と方向こそが本研究で求める「意欲」なのである。

2 意欲の育成における評価の在り方について

まず初めに、本研究で求める「評価」とは、授業の過程において学習指導と一体化して行われる形成的評価の機能を満たすものとする。さらにここで提案した「意欲」の評価として重視した点は、「新しい学力観」に基づく「新しい評価観」の実現を目指し、評価を特に「生徒理解」の側面からとらえたことである。換言すれば、一人の人間としての生徒と一人の人間としての教師とが、人間的な信頼関係を揺るぎない基盤とし、その上でより深く生徒理解に努め、生徒の隠れ持つ優れた点を一つでも多く見出だし、認め、さらに伸ばしていくことを目指す評価なのである。

一般的に形成的評価は到達度を基準として行われる。そのために「～することができる」の記述による行動目標を設定し、到達か未到達かが明確にわかるように、可能な限り客観性を求める方法も決して無意味なものであるとは言い切れない。しかしここに「意欲」として掲示した「音楽への思い」や「その思いを向ける対象の蓄え」などといった概念は極めて抽象的なもので、できたかできないかといった観点では到底評価できるものではない。つまり評価を「生徒理解」の側面からとらえ直し、「新しい評価観」への転換を図って対応しなければ評価できない内容なのである。したがって、その習得をどう見取り、どう認めていくか、つまり評価の視点を新たに確立する必要があった。そこで次の2つの新たな視点を考えた。

1点目は、評価する対象を総合的なものとして捉える視点である。一人の人間や、一つの活動の意味を理解し認めていくには、一つの視点、一つの目標の到達度のみにとらわれず総合的な評価の視点を持たなければならないはずである。例えば「関心や態度、意欲だけで評価することは一面的ではないか」という見解もあるが、これは評価の観点である「関心・意欲・態度」が、授業における音楽活動の中で総合的に評価されるべきであることが理解されていないことから起こるものである。また授業とは意図的な営みであって、目標も当然意図的に計画、設定したものであるが、その流れの中で意図していなかった成果（教師にとっても生徒にとっても）を得ることがあり、それらも評価（生徒理解）の対象として重視した。なお、新指導要録での観点の各々を単独で扱ったり順位性を持たせて評価することは避け、授業のねらいや流れに即して評価の観点を設定した。

2点目は評価を日常的なロングスパンで実施しようとする点である。音楽室での音楽の授業を離れたところで、授業中には見取れなかった生徒の良さを発見し、目標の実現を認めることはしばしばある。授業という限られた時間的、空間的な場の中で即座に「意欲」が育成されていくものとは考えにくい。したがって授業外での情報をも評価の資料として積極的に取り入れ、常に生徒を暖かく理解し、評価とともに「意欲」を育てていくことを心掛けた。

学習指導と一体化して進められいく評価は、その評価結果に基づくはげましや、指導内容によって、授業に臨む生徒の気持ちに大きく影響する。今回の実践においても、生徒を理解しようとする行為が行き過ぎて逆に指導がおろそかになったり、また従来からの基礎力に対する評価もバランスよく織り混ぜていく必要性が残されていることを十分に留意しなければならない点だと考えている。

[指導事例 1] キーボードを弾いてみよう！打楽器をたたいてみよう！ 音楽 1

1. 題材設定の理由

最近の高校生の実態の中には、落ち着いて授業を受けることが極めて困難な場合が見られる。その場合、音楽授業の内容としては、作業的、身体を動かす実技的な学習を行わせることが、一つの工夫として有効となる。楽しみながら音楽に取り組む中で、基礎的な音楽の知識も身に付けられる実践がこれまでの試行錯誤の中から見出されてきたのも事実である。本事例の器楽合奏もその一つである。楽しみながら、実技の向上を目指し、一方で音楽の喜びも実感できる題材として、鍵盤楽器と打楽器を用いた器楽合奏を構成した。

鍵盤楽器（キーボード）は、昨今デジタル化、シンセサイザーによる音楽の流行もあってか、その経験のない生徒にとって憧れの対象といえる。簡単な技術でもキーボードがひける、何かメロディを奏することができることは、このうえない喜びであり、満足感を喚起するものである。その楽器への興味を更に、皆で合奏を作り上げてゆく喜びにまで広げていけたら、と考えた。実践の中で、キーボードのドレミの配列を理解したり、楽譜上の音符を鍵盤上の位置に移すことができるようになればさらに大きな成果となる。リズム打楽器が、リズムパターンを奏し（リズムを体得する）、合奏をリードしたり引き締めたり、うるさくないエッセンスであることを理解させ、打楽器も生きた楽器であるという認識を持たせることを目指した題材である。

2. 指導目標

- (1) 楽器を演奏することへの意欲を持たせ、それを持続させる。単なる遊び感覚から、音楽づくりへと発展させる。この体験が、社会人になってからも音楽を楽しんでいけることの一つのきっかけとなるようにする。
- (2) 五線譜上の音符がわかり、それを鍵盤楽器と照合させて、実際に弾けるようになる。
- (3) リズム譜が読め、リズムパターンを理解する。また、それを打楽器でたたく。
- (4) 合奏に必要な要素としてのパート（メロディ、和音、バス、リズム）の役割を理解する。
- (5) 合奏する際の注意（出だしのタイミング、終止感）を知り、全体の中での自分の役割を意識する。
- (6) みんなで合奏することの喜び、楽しみを経験する。

3. 指導計画

〈第1時〉

- ・これから何をやるのか、楽器合奏とは何かの説明。・教材曲を聞き、イメージを持たせる。
- ・合奏の具体的な構成（パートの種類と人数、使用楽器）の説明。パートごとの模範演奏を聞かせる。・パート分け。

〈第2時〉

- ・キーボード上の音の配列と五線上の音符との対応、及びリズム譜の読み方の理解、確認。
- ・パート譜（ハ長調に移調し、4つのパートごとにアレンジしたもの）を配布。・階名をふる。
- ・個人練習にはいる。＊4つのパート：メロディ、和音、バス、リズム

〈第3時〉

- ・CDで曲を確認。・キーボードでは転調している部分の確認：シャープの数と位置を、生徒の状況に応じて適宜指導する。打楽器では、それぞれの楽器ごとに、どの部分を奏するのか、それはどんなリズムなのか理解し、自分の役割を把握する。・前記を踏まえ、個人練習

〈第4時〉

- ・キーボードは、最初から部分ごとに（フレーズ[A]―[G]）少しずつ合わせる。進度を確認する。・打楽器は、ピアノでひくメロディに合わせてリズムを刻む。曲にあっているか。

〈第5時〉

- ・キーボードは、前半個人練習を行う。後半は、フレーズごとに合奏していく。転調部分に注意。・打楽器は、前時の復習後、4拍子に合うリズムを創作してみる。また、キーボードの合奏に参加。

〈第6時〉

- ・全体合奏、仕上げ。全体合奏の完成に際しての注意事項を指示、確認した後、リハーサル。本番の演奏を録音して鑑賞する。

＊使用楽器＊

- ・キーボード：卓上電子鍵盤楽器 電子オルガン（ペダルをバスパートで使用）

（計約25名）

- ・打 楽 器：スネアドラム、カバサ、タンバリン、ギロ、カスタネット、トライアングル
（各2～3名ずつ、計約15名）

4. 学習の指導の展開

〈第1時〉導入

◆—評価の観点

指導内容	学習活動	留意点
・楽器合奏をクラス全員で作っていく事を説明	・楽器合奏とはどのようなものかおおよそを知る ・教材曲「愛は勝つ」を聞く	・生徒の注意をできるだけひきつける (キーボードを提示)
◆ 楽器合奏を行う事に対する興味・関心はどうか。どんな反応を示すか。(表情や言動でどう現れるか。)		
・パートの紹介 ・楽器の紹介 ・パートごとの模範演奏をピアノで聞かせる(打楽器は奏し方を示す) ・パート決め	・一つの曲がどんなパート(メロディ、和音、バス、リズム)で作っていくか理解する ・どんな楽器を使うか知る ・黒板の希望のパートの所へ名前を記入する	・専門用語での説明は避ける ・パートを組み合わせで聞かせる ・パート分けに無理はないかチェックする
◆ 自分がどの楽器でどのパートを演奏するのか、また、何ができそうか興味を持って考え、決めることができるか。		

〈第2時〉

* キーボード担当者向け: key、打楽器担当者向け: 打

・音符と鍵盤楽器との楽典的指導 ・パート譜を配布	・板書の鍵盤図を見ながら、五線上の音符と、楽器の音の配列との対応を理解する。また、リズム譜の一般的な読み方を理解。 - key-楽譜に階名をふる - 打-リズム譜にタン、タタ等のカナをふる	・予め、ハ長調に移調したアレンジ楽譜を用意 ・階名シールを貼る
◆ 積極的に、自分のパート譜を読もうとしたか、楽典的な内容をどう受けとめたか。		
・個人練習に入る	・自分の楽器を手にして音をだす	
◆ 楽譜上の記号(音符やリズム)を音にして表現することへの姿勢はどうか		

〈第4時〉

・key-個人練習と合奏	・個人練習と、フレーズごとの合奏とを混ぜながら行う	・各生徒の進捗を確認しながら進める
◆ どこまで自分が確実に弾けるようになったかを確認していくことが、次へ進む意欲に結びついているか		
・打-指導者がピアノでメロディを弾き、それに合わせる	・リズムの入るタイミングと、各リズムパターンを正確にたたく	・はぎれよい奏し方に注意する
◆ 曲の4拍子にきちんと合っているか、切れの良いリズムを刻むことへの真剣さ、そして、出来た時の手ごたえは持てるか		

5. 指導及び評価への考察

電子鍵盤楽器（キーボード）という、生徒にとってはそれだけで触れてみたくなるような楽器を使用したことで、導入は比較的スムーズに持っていくことが出来た。楽器への興味をいかに読譜（階名や音価）や鍵盤の配列を学ぶことに結び付けるか、また、楽譜通りに弾けたという達成感や満足感を味わうまでずっと意欲を持続させる事がどうしたら出来るか、の二点が、指導の過程で工夫が要されるポイントであった。打楽器を奏した生徒も含めて、ちょっと難しいリズム型があると、そこで投げってしまう場面も若干見られた。そんな場合、指導者は正しい奏法を繰り返し聞かせ、また励まししながら、徐々に覚えさせていった。生徒にとっては、特にリズム型については、あくまで感覚的な把握で終わってしまい、理論的に理解でたかどうか疑問が残ることは否めない。特に音楽の基礎的な知識の乏しい生徒にとっては、高校生という段階で、基本的な読譜から始めるのは、なかなか難しいことを感じた。ただ、音楽を楽しみたい、という気持ちを自分の力で実現するためには、音符やリズム譜等の知識も必要だという認識は持てたようである。

意欲面の評価については、例えば、電子オルガンの足をバスパートとして手で押して模範演奏すると、そのおもしろさから楽器へ飛びついていった生徒や、曲の最後までキーボードが弾けるまで頑張り、「聞いて、聞いて」と指導者を呼んだり、自分自身に拍手する場面がみられ、楽器を媒体として、自発的に学習活動を行ったり、指導者とも一対一のコミュニケーションをもつことができた。

最後に、以前に比べ随分身近になったキーボードという楽器を経験したことを一つの手掛かりに、生涯に渡って音楽を愛好して欲しいものである。

「愛は勝つ」パート譜抜粋 KAN:曲 原調Ddur

メロディパート

バスパート

〔指導事例 2〕「ラテン音楽のリズム・パターンを用いた打楽器アンサンブル」音楽Ⅰ

1. 題材設定の理由

生徒は授業における合唱や合奏のアンサンブル活動の中で、あらゆるジャンルの音楽に対する興味や関心を示し、また、演奏への欲求を示すことが多い。音楽を演奏する上で多くの場合楽譜が必要になるが、楽譜が読めない生徒はその思いが満たされず、授業への参加意欲を発揮できない場合もある。ここでは読譜力を高めることによりその欲求を満たし、少しでも「音楽への思い」を持続してほしいとの願いから、まず楽譜から音程を取り除いた『リズム』に焦点をあて指導を工夫することとした。

本事例では、生徒の日常聞く音楽に少しでも馴染みのあるものとして、ポピュラー音楽にもよく取り入れられるラテン音楽のリズムを題材として取り上げた。これらの音楽は、軽快なテンポで様々な楽器の組合せによることのおもしろさがあり、またリズムは他人と合わせる関係から必然的に身に付くものであり、グループで活動するのに適しているといえる。

また、ラテン音楽の多くは、多くの国の文化や音楽要素が混ざり合ってきたものであり、世界の音楽の中で主流の一つにもなっているポピュラー音楽も、それらが融合し合ってきたものが多い。異文化の多様な価値観の存在に気づき、生涯にわたり柔軟に対応できる姿勢を育てることで音楽的視野も広げられるラテン音楽のスタイルは多種多様であるが、ここではその特徴を容易に把握でき、親しみながら学習できるよう特にブラジルのサンバとボサ・ノヴァを中心に、カリブ海周辺のリズム・パターンについて実践した。

2. 指導目標

- ① グループによる打楽器アンサンブルを通してリズム感と協調性を養い、音楽を合わせることの楽しさ・喜びを味わわせ、音楽に対する思いをより身近なものとする。
- ② メロディに合ったリズム・パターンをグループで創作することにより、音楽的創造力を養い、主体的に音楽活動する気持ちを持たせる。
- ③ ラテン音楽の主なリズム・パターンやそこで使用される各種打楽器の音色を知ることによりラテン音楽の主な特徴（多様性・共通性）を理解し、生涯様々な音楽を楽しく学習できる豊かな音楽観を育成する。

3. 指導計画（10時間）

第1次（4時間）

- ・人数を増やししながらグループ・アンサンブルに慣れさせる。

①簡単な8小節のリズム譜を2人で (譜例a)

②8ビートを3人で (譜例b)

③ボイス・リズム「野菜の気持ち」を5人で (譜例c)

④上記のボイス・リズムをグループ毎に発表

第2次(2時間)

・ラテン音楽の代表的なリズムについて解説し、クラス全体で基本のリズム・パターンを練習させる。

①ブラジル(サンバ、ボサ・ノヴァ)

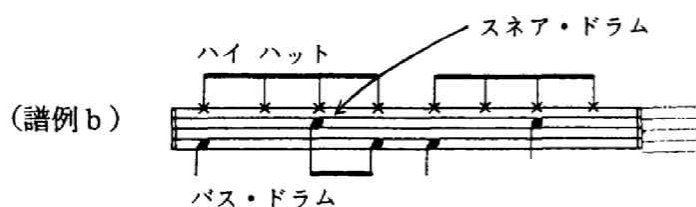
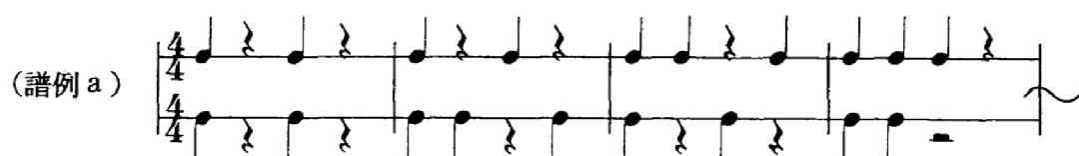
②キューバ(ルンバ、マンボ、チャチャチャ、他)

第3次(2時間)

・グループに分かれ、上記の気に入ったリズム・パターンを応用し、与えられた曲にリズムを創作し、練習させる。

第4次(2時間)

・創作したリズムをグループ毎に発表し、鑑賞と評価をさせる。



(譜例c)

野菜の気持ち
(ボイス リズム)

Allegretto

古谷 哲也 作曲

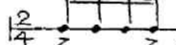
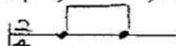
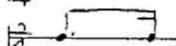
1. パナナ 2. キャベツ 3. しいたけ 4. ポンかん 5. ピーナッツ

(教科書「高校の音楽I」(音楽之友社)より)

4. 学習指導の展開

第2次（第一時）

◆ …… 評価の観点

指導内容	学習活動	指導上の留意点
・ラテン音楽の概要	・特徴についての説明を聞く	・ラテン音楽のそれぞれの共通点について気付かせる。
◆ ラテン音楽に対して興味を持てたか。反応は。実際に聞いてみたくなったか。		
・ブラジルの音楽	・ブラジルの音楽から「サンバ」「ボサ・ノヴァ」を鑑賞する。 ・プリントに気付いた事、感じた事を記入し発表させる（メモ）	・リズム・パターン、使用楽器を図示し、視覚的にとらえさせる。
◆ 他人の意見・感想を聞き、様々な感じ方があったか。		
・「サンバ」のリズム・パターンの実践	・クラス全体で「サンバ」のリズム・パターンを手拍子や机を叩いて練習する。（以下の3種類） A.  B.  C. 	
◆ 3パートのリズムがそろった時の楽しさ、サンバ独特の躍動感を感じられたか。実際の楽器を使用して演奏したい気持ちになれたか。		
	・ボサ・ノヴァについても同様に練習する。	

5. 指導及び評価への考察

リズムを一つのパターンとしてとらえ、楽譜への抵抗感をなくすことで様々な音楽体験への出発点とさせることを考えた。導入での手拍子・机を叩くことより、実際の楽器を使用した時の方がはるかに意欲をみせ、他人とずれないように心がける緊張感が演奏への集中力を高めた。ただ、楽器数に限りがあるため、全グループが一斉に練習できないのが残念である。楽器を用いないボイス・リズムも言葉とリズムが一体化し、簡単に楽しみながらリズムに興味を持たせる教材であると確認できた。

評価の点では、ここではグループでの活動が多いため、できるだけ生徒の中に入って仲間とのやり取りや様子を観察し、声をかけるようにした。教師が一人一人に対して励ますなどのほたらきかけを行うことにより、生徒は心を開き、音楽活動への喜びを素直に表現していた。

本事例での体験は、生涯にわたり音楽への思いを持続させ、様々な音楽体験の一つとして生徒の心の中に残ることであろう。

〔指導事例3〕基本的コードネームを活かした鍵盤和声の理解と実践

～キーボードを利用したアンサンブル～

音楽1

1. 題材設定の理由

基本的和声や調性感の理解は音楽を聴き、演奏する上で大切なことである。これらの学習は、理論を中心に机上のみで扱われたり、実用的なコードネームの活用を目指してギター指導の中で行われたりしている。また、最近の生徒は、読譜力の低下が指摘されている反面、ジャンルを越えて自分達が好んでいる音楽を演奏してみたいという「思い」（意欲、関心）が日頃の様子から感じ取れる。この「思い」を読譜力の育成によって成し遂げさせるために、キーボードに着目した。最近のキーボードの性能は扱い易く簡単な理論の学習と演習で、誰もが早く演奏体験を味わうことができる。特にメロディーに使う音色、伴奏に使うリズムスタイル、コードネームの種類は豊富になってきている。本事例では、ごく基本的な和声（長・短三和音）の仕組みや響きを理解させ、学習の中で扱う。この学習を通して調性のある音楽のメロディーは、コードの上に成り立つことを体験させ、基礎力としての音楽への「思い」の実現を図った。このようなキーボードの活用は、音色・リズムの多様な選択の楽しさ、簡単な奏法による演奏体験を可能にした。また、グループ学習の工夫・発展による一つの曲の様々なスタイルの演奏を通して、個性を生かし、主体的な音楽学習を行えるよう学習指導の工夫を図った。

2. 指導目標

新学習力観における「意欲」の育成を指導目標の念頭において以下の3点を設定する。

- ①音楽の要素としての和音の響きに注目させ、メロディーと基本コードネーム（メジャー・マイナー）の関係、その構成について学び、コードの変化による聴き比べ等和音の面白さ、大切さを気付かせる。
- ②五線譜への記譜法と鍵盤図への転記を1セットとし理解させ、今後の演奏に結び付ける。
- ③キーボードを使用し、遊びながら扱いに慣れる中で、学習したコードネームの実際の曲の中で活用し、アンサンブルをする喜び、達成感を味わせ、主体的に音楽を作り出そうとする意欲を育てる。以上を『思いを向ける対象として蓄える』。

3. 指導計画（10時間）

第2次（2時間）★導入段階では、事前に英語音名と音価についての学習は終わっている。

- ・和音の仕組みや違いを聴き比べ、身近な音楽と和音の関係について気付かせる。
- ・コードネームの基礎知識を知り、その種類を紹介するとともに、メジャー、マイナーコードの五線譜への書き方、鍵盤図への転記の方法を理解させる。(プリント・OHP学習)

第2次(3時間)

- ・メジャー・マイナーコードの三和音の五線譜及び鍵盤図への記譜の練習を重ねる。
- ・キーボードの扱い方に慣れさせる。(音色の作り方、リズムパターンの工夫・テンポの設定等)…… 2人に1台。
- ・コードネームをキーボードを使用して練習。
- ・コードネームとメロディの関係を理解させる。

第3次(3時間)

- ・学習したコードが自由に扱えるかテストを行い、1人ずつチェック。
- ・グループ分け(ふたりずつ)とパート分担。◎作詞・作曲/井上陽水 編曲/河西保郎
- ・各グループごとの練習(音色・リズムの工夫) 『夢の中へ』

第4次(2時間)

- ・発表のための演奏分担とタイトルを付けさせる。(例)ボサノバ風「夢の中へ」等。
- ・各グループごとの発表相互評価及び自己評価させる。まとめ。

4. 学習指導の展開

第2次

◆ ————— 評価の観点

指導内容	学習活動	指導上の留意点
・五線譜と鍵盤図への転記の練習問題(資料1参照)	・プリント学習で数多くの調性を扱い転記について慣れる。臨時記号の扱いに注意しながらノートで鍵盤図で弾く練習をする。	・次回のテスト及びキーボードとの出合いを予告させ目的意識を持たせる。 * # ♭ のどちらをつけるか判断できているかをチェックする。
◆ 五線譜と鍵盤の関係を理解できた喜びを感じ、次の活動への動機付けができたか		
・キーボードの扱い方の理解	・音色の作り方、リズムの種類等自由に遊びながら扱い方に慣れる。	生徒が弾ける曲を様々な音でチャレンジさせる。
◆ 生き生きと音に親しみ楽しもうとしているか		

・プリント学習であつかったコードネームを練習（仮の1台2人のグループ決定） ・メロディーと合わせた練習。	・自分にあつた弾き方（両手・片手）で三和音を押さえ工夫しながら記号→五線譜→鍵盤図→演奏の連係になれる。 ・「エーデルワイス」のメロディーの音色を工夫して2人で演奏。	・フィンガーコードシステムでリズムがついた伴奏ができることを利用する。 ・各グループごとに指導する。 * 連係作業がスムーズにいかかをチェックする。
◆ アンサンブルを楽しんでいるか。また、演奏で生じた問題に対してどのように解決しようとするか（メロディー奏者とコード奏者とのズレ等）		

第3次

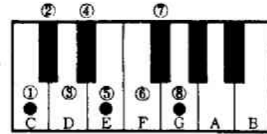
指導内容	学習活動	指導上の留意点
・発表曲の配布と2人グループの決定。 ・学習したコードについてのチェックテスト（練習と並行して）	・「夢の中へ」で使われるコードに注目、五線譜上の和音と鍵盤図を作成する。2人でメロディー・伴奏交互の練習をする。 ・一人ずつピアノの前に呼び、コードネーム→鍵盤図への転記のプリント作成し、ピアノで弾く。	・各グループごとに周り、グループの能力に応じた演奏をアドバイス（特にテンポ） ・能力に応じたコードの押さえ方を指導する中で、生徒個人の中での意欲・関心の変化を観察する。
◆ メロディーと合わせ自分なりの奏法で演奏への「思い」が表現できたか		
・各グループごとの練習・発表会にむけての予告	・音色・リズムパターン（ロック風、ボサノバ風等）などの工夫を二人で相談しながら、キーボードの性能を自由にいかして演奏する。	* アンサンブルをする中でお互いの音を意識して聴いているかグループごとの完成度を判断し必要に応じた指導をする。
◆ 音色・リズム等の選択で個性を活かしたユニークな曲想が表現できたか、演奏で生じた問題に対してどのように解決しようとするか		

①メジャーコード

例



●印をつ
けると



CM

メジャーのMは省略
することが多い。

C E
ドとミの間は①～⑤の5つ、
E G
ミとソの間は⑤～⑧の4つ。

◎メジャーコードは“5・4のジャー”と覚える。

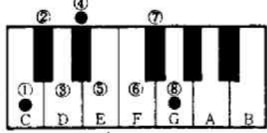
②マイナーコード

例



Cm

マイナーのmは
省略せずに書く。



C Eb G
ドとミの間は①～④の4つ。
Eb G
ミとソの間は④～⑧の5つ。

◎マイナーコードは“4・5のマイナー”と覚える。

〈約束〉五線譜で三和音を書く時は、コードネームの英
語音名の主和音が決まったら、残りの第3音、第5音は、

①主和音が五線上に乗っていたら残りも五線上に重ねて乗せる

②主和音が五線上の間にあれば残りは五線上の間にに入れて乗せる。

臨時記号（シャープ・フラット）は、五線に三和音を書いた後判断する。

特に第3音の五線の音符より右上、右横の黒鍵盤の時#。

第3音の五線の音符より左上、左横の黒鍵盤の時b。



5. 指導及び評価への考察

本事例はコードネームを読譜の一つと考え、まず、その理解を鍵盤図を作成する中で、学習することに指導の重点を置き工夫を図ったが、生徒はパズル感覚で作成の意欲を示し、楽譜との距離を少しではあるが、縮めることができたようだ。今回は、メジャー、マイナーコードの2つに絞って、その他複雑なコードは、全部メジャー、マイナーに省略するよう指導したが、今後は少しずつ法則が簡単なコードへの発展も考えている。実際の演奏になると、生徒は個人差があり、鍵盤図作成までスムーズに行えたのに、コードをリズムによって小節の頭に弾くことができず、苦勞する場面もあった。しかし、キーボードの多彩な機能に助けられ、リズムの選択では、予期せぬ楽曲とのマッチしたグループがあり、教室全体に歓声が上がることもあり、生徒の「音楽への思い」を最後まで持続することができた。評価においては、意欲が前面に出せる生徒とそうでない生徒をどう判断するかが難しい。それを個別のチェックテストの実施で音楽的に診断するだけでなく、『生徒理解』にも努め、より深く生徒を知るために毎時の変化に気を配るよう心がけた。最後に、本事例実施後の学級日誌に日頃何かと無気力な生徒が、音楽の時間はキーボードにのめり込んだと書いてあったことは喜ばしい事実であった。

〔指導事例4〕 生き生きとしたリズムのパフォーマーになろう！

音楽Ⅱ

～8ビートのリズムによる感動体験を目指して～

1. 題材設定の理由

リズム感は音楽の基礎力の一つであり、その育成には今までも色々なアプローチがされている。しかし、それらはかなりソルフェージュ的であり、純粹にリズムの能力を高めることが主目的として取り上げられていて、教師の体験してきた訓練を生徒に追体験させるという方向性が強く、意欲の育成が第一課題の場合、効果をあげることは困難である。リズムの応用実践はクラシック系音楽や、民族系音楽に重点が置かれる傾向がある。ここで取り上げたリズムの指導は「リズムそのものに対する素朴な感動」を根底に置き、「アンサンブルの素朴な喜び」「成就感」を通して生き生きとしたリズム演奏そのものを『意欲向ける対象として蓄え』ると同時に演奏に直結する読譜力をも『対象として蓄え』、『音楽への意欲』を深めることをねらいとしている。そのために、従来のような達成度重視の読譜・リズム指導ではなく意欲の育成を重視した指導とした。具体的なポイントとしては

- ① 音高を抜いたリズム譜によって楽譜を単純化し、さらに8ビートに限定しさらなる単純化によって誰もが達成できるものにした。8ビート系のポピュラー音楽は生徒の関心が高く、この時点での応用力は低くとも『基礎力』の充実により後の発展が期待できる。
- ② アンサンブルを重視し、合わせることの喜びを味わえるようにした。
- ③ 演奏するということを重視し、単なる訓練で終わるのではなく、生き生きとした演奏となるように配慮した。そのために打楽器を効果的に使用した。
- ④ 身の回りの音（また音楽）に着目させ、音楽の基礎にリズムがあるということに興味をもたせ、リズムを意識することで音楽が生き生きと意識できる事に気付かせるようにした。

2. 指導目標

- ① 生き生きとしたリズム演奏を『意欲を向ける対象として蓄える。』
 - (1) リズムそのものに対する素朴な感動を味わわせる。
 - (2) アンサンブルの喜びを味わわせる。
 - (3) テンポに乗った生き生きとしたリズム感を身につけさせる。
 - (4) 演奏できたという達成感と、音楽を主体的にすることの喜びを味わわせる。

② 演奏に結びついたリズム読譜力を『意欲を向ける対象として蓄える。』

- (1) リズムの練習を通して「見る－演奏する－聞く－書く」という4つの要素が総合的に結合された読譜力を育成する。
- (2) 身の回りのリズムを聞き取り、リズムの大切さと面白さを気付かせる。
- (3) 集中して音楽を聞く力を身につけさせる。

3. 指導計画（13時間）

第1次（2時間）

リズムを強調した音楽の鑑賞（リズムの感動体験；exバリのケチャ、カシオペア・パーフェクトライブからドラムソロ。）8ビートの解説。リズムカード（譜例1）作成達成度表の作成。2拍単位の単純な繰り返しのリズム練習。練習の達成度チェック。カードのパターンのリズムのヒアリング。

第2次（4時間）

2人組での穴埋め式アンサンブル。拍子木の導入。4拍単位の単純な繰り返しの練習。意識の中でのリズムのパターン化。ドラムマシーンによるヒアリング。基礎リズムのまとめとしてClapping Musicを練習。Clapping Musicの鑑賞。

第3次（2時間）

身の回りの特徴的なリズムの研究。CM等から8ビートのパターンを探り出し、どのリズムパターンであるかをグループ毎に研究、発表。そのリズムを練習、演奏。

第4次（3時間）

ハイハット、バスドラム、スネアドラムの音によるヒアリング。ドラムセットの説明。3人組で8ビートのリズムパターンの練習。リズムバリエーションをグループで工夫。アンサンブルする曲の説明曲に合わせて練習。フィルインの説明。グループ毎にフィルインを考え、曲に合わせて練習。

第5次（2時間）

アンサンブル発表。自己評価及び相互評価。

★主な使用機材

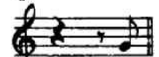
- ・シンセサイザー、音源、ドラムマシーン、コンピュータ、インターフェース、ソフトウェア
- ・アンプ付きスピーカー、ミキサー、パワーアンプ、スピーカー

★第4、5次のアンサンブル曲

- ・楠瀬誠志郎「ほっとけないよ」・PRINCESS²「KISS」・KAN「IN THE NEME OF LOVE」

4. 学習指導の展開

第2次(4時間)

指導内容	学習活動	指導上の留意点
- リズムガードのパターンの復習 2人組での穴埋め式アンサンブル	- リズムカードの楽譜の読み方について復習し全員で叩く。 - あるパターンの休みの部分を補うようなパターンを取り出し、教員対生徒で練習する。	- 全員での練習について行けない者を見ておき、状況に応じて個別練習の時間を取り、指導にあたる。 - アンサンブルの結果として8ビートの基礎的リズムである8分音符の連続(パターン1)なる事に気付かせ、合わせた音に集中させる。
◆パズルのようにぴったりとはまるリズムの組み合わせの存在に興味を示せたか。		
ex. 穴埋め式の組合せの例-2&15 2)  15) 	2人で練習を行う。穴埋め式の他の組合せを2人で考え、練習する。 - アンサンブルがきちんと合うようにし、出来たグループから教師の前で演奏し、チェックを受ける。	- 互いの音を良く聞かせ、テンポを合わせるといふアンサンブルの基礎を身につけさせる。 - カードの組み合わせが2と15、3と14、4と13というように逆順に対応していることに気付かせる。 ※お互いの音を聞き合いながら叩けているか。教師の打つカウントに合わせられるか(同じテンポに乗っているか)
◆アンサンブルを楽しんでいるか。テンポを合わせようと集中しているか。2人のタイミングをぴったり合わせることに喜びを感じているか。		
- 即興アンサンブル - 拍子木の導入	- 教師の提示するパターンを2小節聞き、それに合うパターンを考えて教師対生徒で叩く。 - 拍子木の使い方を学び、叩く練習をする。	- 元のリズムがどのパターンであるか集中して聞かせ、組み合わせを探させる。 - 色々叩いて見せ、叩く点で音色が変わる事に注目させ良い音が出るよう各自で工夫させる。
◆手拍子との音色の違いに興味を示したか。叩く点で響きが変わることに興味を示したか。良い音色になるようなポイントを探しているか。		
4拍単位の単純な繰り返し練習	リズムカードを組合せ、今までの2拍のパターンを合成して4拍のパターンが出来る事を学ぶ。2人で協力しながら同じリズムを練習する。	新しいパターンと言うよりは今までの応用という意識を持たせる。同時に読譜を1つ1つの音符で行うのではなく、カード毎のリズムのまとまりとしてとらえるよう指導する。
◆リズムの組み合わせで思いがけない色々なパターンが出来るということに興味を示したか。色々とカードを組み合わせで新しいリズムを創造しようとしているか。		
- ドラムマシーンによるリズムパターンのヒアリング - Clapping Musicの練習	- 教師の叩く各種打楽器の音を聞き、それがどのパターンであかかを判断する。 - Steve Reich作曲のClapping Musicの基本リズム(2&3&9)を練習する。 2人組になり、パート1の人はそのまま、パート2の人は最後に四分音符1拍分をつけ加え2人でもう一度そろって繰り返す。 - 出来たものからチェックを受ける。成功したらスピードアップする。(スピード段階: 100, 120, 144, 160, 184)	- リズムマシーンを使用して、色々な音色で生徒の耳を引き付ける。 ※見る-演奏する-聞く-書くの4角形が成立したか。 - パターン3から9にかけての拍の頭が休符になる所を特に意識させ、リズム読みで「ン」をはっきり読ませるようにする。 - パート1の人が8回目、パート2の人が7回目の時に合うことを示唆する。 - 合わないグループには何故合わないのかを考えさせ、問題点を見つけさせ、お互いに改善させる。 - 全員J=144で合格できることを努力目標とする。
◆最後にもう一度リズムが2人そろった時の喜びを感じれたか。スピードアップしてみようという意欲を持てたか。		
- Clapping Musicの鑑賞 - 身の回りのリズム探し予告	- Steve Reich作曲の原曲を聞き、半拍ずつ前にずれるというよりスリリングなリズム体験をする。 - CMや身の回りの音の中から今までやったリズムがつかわれている物を探してくる。	- 自分達が演奏したものとの違い(後ではなく前にずれる、1拍ではなく半拍ずれる、同じ組み合わせを繰り返す)を意識させる。 - 一例を示し、普段から周りの音を良く聞くように指導する。

第4次(2時間)

指導内容	学習活動	指導上の留意点
- ハイハット、バスドラム、スネアドラムの音によるヒアリング - ドラムセットの説明	- ハイハット、バスドラム、スネアドラムの音色でそれぞれ2つのリズムパターンを聞き、当てはまるリズム(の組み合わせ)をリズムカードで探す - ヒアリングの答え合わせをしながら各楽器のことを学び、それぞれの役割について学ぶ。 3つを合わせた8ビートの基本的なパターンを聞く。	- 各楽器の説明の導入として使うので、それぞれの楽器の特徴を表すリズムを使う。 - ex. ハイハット パターン1、2(最後の音をオープンで) バスドラム パターン8&14、8&3 スネアドラム パターン14、11&9 - 実物を叩いて見せ、それぞれの音を確かめさせ、音色の違いと役割の違いを認識させる。 - ハイハットのオープンとクローズの音の違いに注目させる。
◆ドラムセットの各楽器の音色に興味を示したか。3つの楽器が合ったときに生じる8ビートの特有のノリを感じているか。		

・シンセサイザーのドラムの音色によるドラムパターンの練習 ・パリエーションの練習	・バスドラム、ハイハット+シンバル、スネアドラム+タムタムそれぞれのパートを3人で分担し、1つのドラムパターンを3人組でアンサンブルする。 ・出来たグループは ①パターンを変えて練習する。 ②ハイハットのオープンやクラッシュシンバルを使って、より面白いパターンを工夫する。	・テンポを合わせる事、お互いの音を良く聞くことに留意させる。 ・いくつかの基本的な8ビートのパターンを提示し、色々なパターンに挑戦するよう励ます。 ・オープンハイハット、シンバルの混ぜ方のヒントを与え、より面白くなるようにお互いに意見を出しながらパターンを工夫させる。
◆8ビートのノリを楽しんでいるか。3人で協力しながらより面白いパターンを作ろうとしているか。		
・アンサンブルする曲の説明、選択	・曲(ドラムの入っていない)を聞いて、どの曲にするか、どのようなリズムが合うか、各グループで相談して練習する。	・パターンは基本的にグループで考えさせるが決めかねているグループには基本的なパターンから選ぶ形をとるようアドバイスする。
◆曲と合わせることに喜びを感じているか。同じパターンだけでは曲としてまとまらないと感じたか。		
・フィルインの説明 ・フィルを入れた曲の練習	・演奏してみた意見を出し合う。 ・シーケンサーのフィルインのパターンを聞いてフィルインとは何であるかをつかむ。また実際の曲からフィルインを聞く。 ・フィルインのパターンのプリントを見て、色々なフィルインをフレーズの終わりに入れてみる。 ・どのリズムパターンを使い、どのフィルを入れるか考え、プリントに書く。曲に合わせて練習する。	・同じパターンの連続では曲としてまとまらないことに気付かせる。 ・フィルインが入ると曲に変化が出て、ノリが良くなる事を感じさせる。 ・フィルインは他の楽器との音と密接な関係があることに気付かせ、選択させる。 ・シンバルを入れるタイミングについて考えさせ、やたらと入れるのではなく効果的に使うようアドバイスする。
◆アンサンブルを楽しんでいるか。お互いに意見を出しながらフィルインを工夫してより良い仕上がりを目指しているか。		

譜例1 ; リズムカード



譜例2 ; 8ビートのパターン例

ハイハット 4/4 パターン + ... Close 1&1 ... Open

スネア 4/4 14&14

バスドラム 4/4 8 & 3

譜例3 ; 身の回りのリズムの例 (CMの中から生徒の考えたもの)

- ・サッポロイチバン ミソラーメン



5. 指導及び評価への考察

評価の手段を①授業中のダイレクトな反応②毎週提出させる「その日やったこと、自分が成長したと思うこと、感想反省等」を書くノートのチェック③授業のビデオ分析の3つで主に行った。限定単純化したことで多くの生徒が熱心に取り組み、達成できた成就感を味わった。同時に単なる練習で終わらせず、教師の前や生徒の前での発表は演奏するという事への意欲を多く持たせることが出来た。ホームルームに戻ってからリズムの練習を楽しそうにしていた生徒の存在や、Clapping Musicで最後に合った時に手を取り合って飛び跳ねながら喜ぶ生徒の姿は研究のねらいの妥当性を示すものであった。また、身の回りのリズムに注目する過程で音楽の中のリズムが重要な位置を占めているということに興味を持ち、集中して音楽を聞くことが初めて出来た生徒もいた。ソルフェージュ的なリズム訓練では達成できない手ごたえである。時には難しいと言って投げだそうとす生徒もいたが、周囲の生徒の熱気でやろうという姿勢を見せ始めた。アンサンブルが単なる音楽面だけでなく、人間関係をも作り得るものであることを強く感じた。こうして培ったリズム演奏への意欲はこれからの色々な場面での演奏に結びつくであろうと大いなる期待を寄せている。今回のリズム自体は音楽の基礎と呼ばれるものの一部でしかないが、ここで身につけた『基礎力』は生涯、音楽を楽しむための大切な能力として育まれるであろう。

1. 題材の設定理由

マス・メディアの発展やカラオケブーム等によって高校生の音楽に対する情報収集能力には目をみはるものがある。常に自分が選んだ自分の気に入っている音楽をそれぞれが有し、それぞれが自由に楽しんでいる。しかしその楽しみ方はあくまでも個人的レベルであり、感動や発見を具体的に他人に伝えたり、共感したり、また音楽を通して議論したりする機会は乏しいように感じる。情報収集能力が高いということは「音楽への思い」は少なからず持っている。しかしさらに多角的に、また友達や年代層の異なる教師や親等と人間的なコミュニケーションを伴って音楽のやりとりができると、さらに視野が広がり音楽への思いを一層深く聴き入ったり、分析的に評価したりする能力も生涯にわたって備わってくるものと予想できる。

そこで本事例では、一つの自分の好きな音楽を取り上げ、いったいどこが好きなのか、何に感動したのか、そして自分の心や気持ちがこの曲によってどのような影響を受け、どのように変化したのか等を、人に伝える形で表現する経験をさせた。その上で人の感動を理解し、認め、その影響を受けてまた新たな人が一つの音楽によって感動や喜びを抱き、その輪が次々とクラス中に広がっていく素晴らしさを体験させようとした。最終的にはクラス全員の曲紹介を兼ねた感動メッセージを冊子としてまとめ、全校生徒に配布する計画を立てた。

2. 指導目標

①自分が最も好きな音楽に対する「思い」を明らかにし、それを他人に向けて表現し、伝えることにより、音楽を通してできる仲間を増やし、共感したり、議論したりできることの素晴らしさを体験させる。

－〈①の下位目標として〉－

②好きな曲、感動した曲について、なぜ好きになったか、どこに感動したのか等を曲の側と自分の側の両面から分析し、紹介文として表現させる。

③他人の紹介する曲を通し、その曲の価値やその人の心情面を理解し、尊重する姿勢を育てる。

④一人一曲の紹介文を集めたメッセージ集『2年EFG組音楽選択者が選ぶBEST47』を作成する。

3. 指導（学習活動）及び評価の実施計画

前段階10時間（本掲載事例）、以後毎授業では20分ずつ他の学習と平行して数時間。

第1次（2時間）	- 今後の学習活動計画を決定する。（教師案に生徒の意見を取り入れる） - 今現在「最も好きな音楽」「とりこになっている音楽」「人に是非とも紹介したい音楽」といった観点から3曲程挙げさせ、匿名で曲名を発表する。
第2次（2時間）	- それらの曲についてのクラスの反応や好みの状況を公表し、お互いを認め合うことの大切さを慎重に説明する。 - 他人に自分の気持ちや曲の素晴らしさを表現することの意味を伝え、クラスの状況を見ながら、自分の薦める1曲を決定させる。
第3次（4時間）	- 資料や友達との意見を交わさせながら、紹介文を作成させる。 - 教師と1対1で紹介文を検討する。この時、教師との会話を通して、曲についての感動や思いを明確化させ、文章作成の手助けをする。また生徒の様々な内面や、音楽に対する思いを理解する（評価する）ための重要な機会としてこの場面を重視する。
第4次（2時間）	実際に音楽をグループ等で聴きながら意見を交わす場を設け、文章を完成させる。 ・メッセージ集の作成

4. 学習指導の展開

学 習 指 導 の 展 開	指導上の（援助のための）留意点
〔第1次〕 - 音楽を通して得た感動や体験を自分の内だけに閉じ込めておかず、人に伝え、共感の輪が広がっていくことの意味と重要性を説明する。 - 今後の学習計画を提案し、生徒の意見も取り入れ決定する。 ◆評価の観点…この時、「よしこれは面白い」「とっておきの曲がある」といった反応が見られれば、動機づけとして成功である。（録音し、授業後に分析） ・例として紹介文の見本を提示する。「ぼくが今一番とりこになっている曲はこれなんだ…」マライア・キャリー：『Emotions』の紹介と鑑賞。 ◆評価の観点…これからの活動の方向性がわかったか。また作文や感想文のための授業ではなく、音楽活動が中心になっていることを理解してくれたか。 ・今現在「最も好きな音楽」「知らない人がいたら是非とも紹介したい音楽」という観点から、3曲ぐらいを記入させ回収する。（曲名、アーティスト名、その音原を持っているか否かも記入）回収後、曲名を通し番号をつけながら匿名で発表し、板書する。生徒にも写させ、知っているかいないか、聴いてみたいか興味ないか、をアンケート的に記入させていく。 ◆評価の観点…1曲1曲読み上げる時の生徒の反応が極めて重要である。「知ってる知ってる」「エー、そんなの聴いてんの」「先生、それ誰の曲だっけ？」等の声に注意しながら進める。（録音し、授業後に分析）	- 生徒が主体となって活動する内容なので、出来る限り生徒の意向を取り入れる。 - 通常の感想文との違いを述べる。 - そのような曲がない生徒にも配慮するが、「家に帰ってゆっくりと何か思い出してごらん」のような投げかけをする。 - 曲や相手を非難するような発言が出た場合、お互いの音楽を尊重することの大切さを述べる。
〔第2次〕 - 前時のアンケートの集計を発表する。生徒はこの時、自分の好きな曲が他のクラスメイトがどれだけ知っていたか、興味を持っているかを知ることができる。 - 周りの生徒との対話を許しながら、自分がこのクラス全員に、ひいては全校に薦めたい1曲を、集計結果を参考に決定させる。 ◆評価の観点…回りの生徒との対話を許すことによって、すでに本主題の目標（指導目標①）が少しずつ実現され始めていることを確認させる。また自分の薦めた曲を他人に伝えることに自信や誇りをもっているか、その対話の中からチェックする。 ・最後にアンケートの結果、人気の高かった曲を鑑賞する。 尾崎 豊：『I LOVE YOU』の鑑賞。	- 知っているかいないかの数と、興味を持っている数のみ発表する。 - この曲を薦めた生徒には了承を得る。

[第3次] ・200字という大まかな字数制限を与え、持参してきた資料等を参考にしながら紹介文を作成させる。 ・でき次第、教師と1対1で文章を検討する。その時、生徒が文章で表現できなかった感動の様子や音楽に対する思いを話し言葉で導き出し、文章化することを手伝う。また生徒の好んでいる音楽傾向や、日頃の音楽経験なども聞き、今後の生徒理解に役立たせる。 ◆評価の観点…本主題の最大の評価場面。まず自分の大好きな曲に対する「思い」や感動を表現することができたか。さらに他人に強く推薦している文章となったか。文章で表現しきれなくても、教師との会話のなかで、話し言葉で語りかけてきたか。そして、仲間に思いを伝え、共感し、話し合ったりする経験の第一ステップになったか。	・資料の丸写しや、あいまいな感想文にならないように注意させる。例えば「とてもいい曲なので…」とか「感動しました」のような抽象的な表現ではなく、どこがいいのか、何がいいのか、どのように心が動いたのか、それは曲のどういったところでそうなったのか、等のようにできるだけ具体的に表現させるようにする。 ・指導というよりは助言であったり、理解であるような対話にする。教師と生徒との音楽を通した人間的な暖かいコミュニケーションとしたい。
[第4次] ・メッセージ集の作成。ワープロで打ち直した原稿にイラスト等を加え製本する。 ◆評価の観点…個人のレベルを越えて、クラス一丸となって取り組んでいるか。 〈最後のまとめとして…〉 他人の紹介する曲を通し、その曲の価値やその人の心情面を理解し、尊重する優しさをもって接してほしいことを再度主張する。また音楽はこのようなして時代や人間を越えて受け継がれていくことを認識させ異文化理解の一助とさせる。 ・以後、授業の中で数曲ずつ冊子に紹介された曲を鑑賞していく。	

5. 指導及び評価への考察

本実施事例は、先に規定した「意欲」を鑑賞活動を通して育成していくものであった。一つの音楽を聴き深め、さらにそこで得た感動や曲に対する思いを明確にして、さらに他人にそれを伝えることができる力は、まさに生涯にわたる音楽への「意欲」であり、重要で基礎的な学力として改めて認めることができた。

例えば、ミュージシャンを目指しているまだ無名の先輩が作曲した曲を何とかそのよさを友達に伝え、認めてもらおうと奮闘した生徒、あるいは文章では表現しきれず、言葉や身振りで一生懸命自分の感動を伝えようとする生徒の姿は、本授業によって、初めてうかがうことができるものであった。また、授業中の録音テープから聞き落としていた生徒の発言を新たに認めたり、発言や行為の意味内容を授業の文脈に即して再考察することにより、一層生徒の「意欲」が見え、生徒理解としての評価の対象として有効だった。

一方、指導目標③の、他人の好きな音楽を尊重したり認め合ったりする姿勢や雰囲気作りは、今後引き続き育てていかねばならない課題として残された。「私がこんなに好きな音楽を他人にけなされるのはとても辛い」と、あるバンドの熱烈なファンである生徒が言った言葉は象徴的であった。音楽教育にとどまらず、さらに広く異文化理解や、人権尊重の教育とも関連付けながら取り組んでいく必要があるものと思われる。

IV まとめと今後の課題

本年度教育研究員は、生徒一人一人が生涯にわたって音楽を愛好していくためには、音楽における基礎力を育成することが不可欠であると考え、「新たな音楽的基礎力としての「意欲」を育成するための指導と評価の工夫」を主題に定め、研究を進めた。

本研究では、今般、新たに示された生徒指導要録の評価の観点における「関心・意欲・態度」の「意欲」を重視し、この「意欲」を、新たな音楽的基礎力としてとらえ、更に、「意欲」の育成における評価の在り方を研究することとした。

音楽的基礎力は、一般的に、読譜力や視奏力等としてとらえられているが、本来、主体的に音楽活動を行うための基礎として生徒に身に付けさせるべきものである。つまり、主体的な音楽活動を促している生徒の心の中にこそ、音楽的基礎力が存在していると考えらるべきであり、心の中に在るものが「意欲」なのである。

「意欲」は、具体的に「音楽への思い」と「思いを向けられる音楽的对象」が存在していることであり、このような事態を学習指導を通して生徒に多くもたせることによって、それらが音楽的基礎力として培われていくことになるのである。

このような考察を通して本研究では更に、「意欲」を育成するための評価の在り方を研究した。

その際、評価を、特に生徒理解の側面からとらえ、教師と生徒との信頼関係を基盤として、一人一人のよさを認め、それを伸長させることを目指した。

その結果、生徒が主体的に音楽活動できる題材を構成し、指導の過程の中でできるだけ、ほめたり、励ましたりする機会を多く設定した。

このことによって、楽しい雰囲気の中で学習が行われるとともに、一人一人の「音楽への思い」と「思いを向けられる音楽的对象」が、培われてきた。

5つの指導事例は、キーボード、打楽器アンサンブル、コードネーム、8ビートのリズム、自分の好む曲の鑑賞等の題材を工夫し、「意欲」の育成を重視したものである。

今後の課題の第一は、新たな音楽的基礎力としての「意欲」が、生徒の心の中で、さらに深められるよう、多くの音楽的感動体験を得させる指導の工夫を行うとともに、指導計画の充実を図ることである。

第二に、新学力観及び新評価観として示された評価の在り方を十分考慮して、生徒一人一人の意欲を重視した評価を重視して、形成的評価の機能を生かしながら、学習指導の中に計画的に位置付け、生徒の全体象を総合的に評価していくことが今後の大きな課題である。